

藤原清輔の反伝統的詠歌をめぐって

芦 田 耕 一

六条藤原清輔の詠歌については、いままでたびたび論じてきた。清輔本『古今集』⁽¹⁾に拠り、『万葉集』歌をそのまま受容し、祖父顕季や父顕輔詠を踏襲し、そして「歌枕」の持つイメージの枠内に止まった歌を作ることが多い点からみて、清輔は基本的には守旧的な歌人だと言えるだろう。ただ、これが彼の本質に由来するのか、あるいは父祖から自分へと続く「歌の家柄」を意識してそうならざるを得なかったのかは分明ではない。

ところで、彼の歌に新しさを見出すことはできないのであろうか。いくらか拾い上げることが可能である。ただし、直截的にそれを詠むのではなく、ある伝統的な又は権威付けられたものに対抗していることが分かるような歌体で彼自身の見つけ出した美を指し示すのが多い。そこに彼の反抗精神を感じ取ってよいかも知れない。

以下の論において、これらの歌の特徴を述べ、このささやかな抵抗で彼は何を言いたかったのかを考えることができるかと思っている。

一

まずは次の歌からはじめよう。「梅」とある、

21 なさけあらん人にみせばや梅の花をりをりかをる春のあけぼの

第四句「をりをり」は『清輔集』の数本に「数々」と見える。梅香は歌に多く詠まれているが、時間的には夜が

多数を占める。

(詞書省略)

みつね

41 春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくる (古今集・春上)

(詞書省略)

藤原顕綱朝臣

59 むめのはなばかりにほふはるのよのやみはかせこそうれしかりけれ (後拾遺集・春上)

(詞書省略)

前大宰大式長房

18 むめがえにかぜやふくらん春の夜はをらぬ袖さへにほひぬるかな (金葉集・春)

のように闇や夜そのものと共に用いられてその芳香が強調される。清輔はこれとは違って「あけぼの」という時間帯である。ここに言う「春のあけぼの」は、れいの『枕草子』冒頭、

春は曙。やうくしろくなり行、やまぎはすしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

によってコピー化された観のある景物だ。和泉式部はこれに挑むかのように人事に用いる。

夜、いもねぬに、障子をいそぎあけてながむるに

188 恋しさもあきのゆふべにおとらぬは霞たな引く春のあけぼの (和泉式部続集)

と詠み、一般化されている秋の夕暮に劣らない春曙の特に人恋しさを発見したのである。

そもそも春曙が梅花とともに詠まれるのは当該歌が最初であろう。夜明けの薄明をいう曙は眠りからいまだ覚めやらない意識もろうの時間帯であり、夢幻性と妖艶な趣をもっている。これに折々の梅花の甘美な香が加わり「数々かをる」よりも「をりをりかをる」の方が情緒的にふさわしい、いわば視覚と嗅覚のない混ぜになった情調を詠んでいる。

この組み合わせが次に見られるのは『千載集』春上である。

題しらず

仁和寺法親王守覚

28 梅がえの花にこづたふうぐひすのこゑさへにはふ春の曙

題しらず

権大納言実家

29 風わたるのきばのむめに鶯のなきてこづたふ春のあけぼの

後者は初め二句から香がそのあたりに漂い満ちていることを暗示している。この二首は当該歌とは異なって「鶯」が詠み込まれており、視・聴・嗅覚が交感された春の情調をうたっている。

藤原定家は次のように詠む。

5 梅の花梢をなべて吹く風に空さへにはふ春の明けぼの（拾遺愚草上・初学百首）

春曙に、梅花を吹き渡る風に誘われて梅香が匂い立つという意であり、風を仲介にする点で清輔の素朴な詠み方とは異なっている。『千載集』詠とどもこれらは当該歌を脳裏に思い浮かべていたことはまず間違いないと思う。それほどまでに注目されるこの発想に、清輔自身は自信をもっていたのではなからうか。初め二句の措辞に酷似する歌に次のものがある。

月のおもしろかりける夜、はなを見て 源さねあきら

103 あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれらん人に見せばや（後撰集・春下）

正月ばかりにつのくにはべりけるころ人のもとにいひつかはしける 能因法師

43 こころあらむ人にみせばやつくのなにはわたりのはるのけしきを（後拾遺集・春上）

「あはれしれらん人」「こころあらむ人」はいずれも情趣を解する人という意であり、春の景物として優れているのでこれらの人に「見せばや」とうたっている。「なさけあらん人」もこれらと同じレベルであろう。つまり、清輔がこういう人に「みせばや」とするのは自分の創見に対して自信をもっている体なのではないか。

では、彼をしてこういう態度をとらせたのは何に由来するのであろうか。当該歌に見られた助詞「ばや」に引かれて、これを詠み込む清輔詠によって考えてみたい。

「暮春」に、

59 おほかたも春ぞくるるはをしきかと花なきやどの人にとはばや

藤原清輔の反伝統的詠歌をめぐって

があり、『久安百首』に詠まれたもの。一般的に言っても、春が暮れるのは惜しいかどうか、花が植わっていない家の人に尋ねてみたいという意であり、花とは無関係に惜春の情があるか否かを清輔は詠む。これに関わる歌に次のものがある。

亭子院の歌合のはるのはてのうた みつね

134 けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかげかは (古今集・春下)

やよひのつごもり みつね

145 くれて又あすとだになきはるの日を花の影にてけふはくらさむ (後撰集・春下)

両詠に共通するのは、惜春の情は結局のところ花を惜しむのに他ならないということであり、これが一般的な詠まれ方であった。これに清輔が疑問を呈して、「花なきやどの人にとはばや」とうたっている。

次は「月三十五首のなかに」とある、

155 月見ればたれも涙やとまらぬとおもふことなき人にとはばや

これは五九番歌に歌体の点においても似る。月を見ると誰も涙が止まらないかどうか、物思いのない人に尋ねてみたいという意である。これに関わっては、直截に涙を詠み込むことはないが、著名な、

(詞書省略) 大江千里

193 月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど (古今集・秋上)

をいま上げるだけで充分であるう。実は清輔はこの歌以外にこれに類するものを二首詠んでいる。おのおの「月」
「月三十五首のなかに」とある、

128 いまよりはふけゆくまでに月は見じそのこととなく涙おちけり

154 いまよりは心のままに月は見じ物おもひまさるつまとなりけり

前者は後に『千載集』雑上に入集する。同じく「涙」を詠み、第二、三句の条件が加わる。後者は物思いの種となるので思いのままに月は見るまいという。

このようにうたう清輔であるが、本当に「月見ればたれも涙やとまらぬ」かどうかを確かめるといふ趣旨でこう詠んだものだろう。特に、彼には述懐風の歌が多く見られることが「おもふこと」と関係付けるのに与っているように思う。

既成のものに疑問をもったり、確認したりするのは、物事を見直す契機となつて根源に迫りうる。この営為が二首歌の創出につながつていったのではないか。そして、あのような自信にあふれる揚言をもつて詠まされたのであろう。

○

次に、「秋はな」の、

113 うすぎりのまがきの花のあさじめり秋は夕とたれかいひけん

を検討しよう。『久安百首』の歌であり、後に『新古今集』秋上に「崇徳院に百首歌たてまつりける時 清輔朝臣」として歌詞も異同なく入集する。これも二首歌と同じように、『枕草子』冒頭によって規範化された美意識に異を唱えた歌となっている。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすの寝所へ行とて、三四、二みつなど、とびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさくみゆるは、いとおかし。日入はてて、風の音むしの音などいとあはれなり。

秋の夕暮の趣であるが、ほとんどが動物の景でもって表現されている。清輔は二一首歌と同じく植物を詠み、秋の朝方の風情をうたう。「まがきの花」については、久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』で「もともと夏のものである花がすがれて僅かに咲き残っている景を考えた方が遙かに情趣がある」と説かれている。「あさじめり」に関しては、清輔以前に用例を見出しがたく、このためか『清輔集』の数本に「あさけしき」とある。これ以降は、清

輔の影響下にあると考えられる覚性法親王の『出観集』に、

萩

323 秋はぎの上葉下葉のあさじめり心くるしきはなのかほかな

と踏襲され、さらに『後鳥羽院御集』の「同（注、承元二年）外宮卅首御会」に、

秋

1394 末たわむ庭のこはぎの朝じめり物おもふ雁やなきて過ぎつる

と見られ、後者は雁の涙で小萩が「朝じめり」している趣である。この措辞は、朝しつとりと湿っている意。後者は当該歌を意識した表現と考えられるが、それ以上に院が脳裏に思い浮かべて作ったのが『新古今集』春上に入る、

をのことも詩をつくりて歌にあはせ侍りしに、水郷春望といふことを 太上天皇

36 見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけむ

であろう。これは秋の夕暮に対して春の夕暮、清輔詠は秋の夕暮に対して秋の朝方という違いは見られるが、対象とされるのは同じである。既述した和泉式部の歌も秋の夕暮に対してであり、やはり『枕草子』の影響が大きかったと言えよう。

いま一つ注目したいのは第五句「たれかいひけん」であり、これは二一番歌の初め二句と同じように清輔自身の美意識に対する自信の表われがこう言わせたと考えられよう。

○

「萩花勝春花」の、

107 小萩原やなぎさくらをこきませし春の錦もしかじとぞおもふ

を問題にしよう。まず「小萩原」で切れ、その様子は柳と桜の織りなす「春の錦」も及ぶまいとする。「小萩原」

を詠んだ最初の歌と思しいのは『為仲集』の、

(詞書省略)

29 小萩原分けつるほどにぬれにけりいくばく^{ハママ}かりに置ける露ぞも

か、『金葉集』秋の、

(詞書省略)

僧正行尊

228 こはぎはらにほふさかりはしらつゆもいろいろにこそ見えわたりけ
れであり、「露」とともに詠まれる。

比べられた第二、四句は『古今集』春上の、

花ざかりに京を見やりてよめる

そせい法し

56 みわたせば柳桜をこきませて宮ごぞ春の錦なりける

であることは言うまでもない。もともと「錦」はたとえば『古今集』秋下の、

題しらず

よみ人しらず

283 竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

のように秋の紅葉にたとえられるのが普通であり、『古今集』五六番歌は春の景としており、その点が眼目となっ
ているのだろう。清輔はさらに『古今集』五六番歌を否定し、後者の紅葉に代って「小萩原」の「錦」という新し
い景物をうたうのである。「萩の錦」の先行歌には、『千里集』の、

山花織錦無郷春

91 やまごとに萩のにしきをおればこそみるにこころのやすき時なき

があり、これは山一面に咲く萩の花を錦に見立てたもの。これを清輔が知っていたか否か明らかでないが、当該歌
は『古今集』のように複数のものがない混ぜになっただけではなく、小萩だけによってなされる錦を賛美してい
る。そしてまた、春と秋という異なった季節を組上に載せていることが今までの例歌とは違っている。

最後に、美的創見への既述の断定的な自信に満ちた口吻とは少し違って「しかじとぞおもふ」とやや謙遜的な言辭になっていることに注意したい。

なお、「小萩原」と「錦」を詠み合わせるものに顕昭撰『今撰集』の、

鹿声有野

中将実家

86 小萩原にしきをしける野辺にこそ立ちわづらひて鹿は鳴きけれ
がある。『実家集』にも見られ、初句は「まはぎはら」第五句は「しかはなくなれ」とある。藤原実家は清輔より四十歳くらい年少で、清輔詠に倣ったものか。

○

四番目の歌として、「月三十五首のなかに」とある、

136 いかなれや花もみぢもをりこそあれ年の一とせあかぬ月影
を検討しよう。この歌群は秋の月はもちろんのこと季節には関係なくいろいろな月詠が入る。花も紅葉もその折によつては美しいが、どういふわけで月光は一年中美しくて見飽きることがないのかというのが歌意である。一般的に月光は秋に詠まれるのが普通であり、「年の一とせあかぬ月影」とうたう清輔は特にどの季節の月光を普通に言われるものとは違うということの問題にしようとするのだろうか。

まず春の月であるが、用例は必ずしも多くはなく、たとえば前述の『後撰集』一〇三番歌や『金葉集』春の、

後冷泉院御時、月のあかりけるよ女房たちぐして南殿にわたらせ給ひたりけるに、にはのはなかつちりて

おもしろかりけるを御覧じて（以下省略） 下野

69 ながきよの月のひかりのなかりせばくもるのはなをいかでをらまし
のように詠まれる。夏の月については、

夏夜月といふ心をよみはべりける 土御門右大臣

222 なつのよの月はほどなくいりぬともやどれる水にかけをとめなん

大式資通

223 なにかはあくるしと思ふべきひるにかはらぬ夏の夜のつき（ともに後拾遺集・夏）

夏月のころをよめる 源親房

152 たまくしげふたかみやまのくもまよりいづればあくる夏のよの月（金葉集・夏）

とあり、ともに歌会での詠か。これらに對して冬の月はどううたわれるのであろうか。

高岳相如が家に、冬のよの月おもしろう侍りける夜、まかりて もとすけ

1146 いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり（拾遺集・雜秋）

題不知 読人不知

148 あきはなほこのしたかげもくらかりき月はふゆこそみるべかりけれ（詞花集・冬）

そして、永承四年（一〇四九）の『内裏歌合』の「月」に「少納言伊房」作、

6 あきとのみいかなるひとかいひそめしつきはふゆこそみるべかりけれ

とあり、冬の月は多く詠まれている。この各歌が、冬の月を「春の花にもおとらざりけり」「ふゆこそみるべかりけれ」のごとく、ことさらに注意を喚起する体であることに気付く。つまり、それだけ冬の月はもともと賞美に価するものではなかったと推測されるのである。

最後に、『源氏物語』「朝顔」巻の有名な部分を上げよう。光源氏は紫の上に次のように説く。

時／＼につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ、あやう色なきものの身にしてみても、この世のほかの事まで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬおりなれ。すさまじきためしに言ひをきけむ人の心あささよ」とて、御簾巻き上げさせ給ふ。

源氏は、人々が心ひかれる花や紅葉の盛りよりも冬の夜の澄んだ月に積雪の映えて見える空が趣深いと言う。花

や紅葉と比べるのは当該歌と同じ。この少し前にも、

月さし出でて、うすらかに積れる雪の光あひて、なか／＼いとおもしろき夜のさまなり。ありつる老いらくの
心げさうも、よからぬもの世のたとひとか聞きし、とおぼし出でられておかしくなむ。

と同じように表現されている。この部分について、『河海抄』は「清少納言枕草子すさまじきものおうなのけさう
しはすの月夜と云々」と注を付すが、現存『枕草子』諸本にこの本文を持つものはない。確かに、このあたりは
「御簾巻き上げさせ給ふ」と『枕草子』を意識した表現が見られ、また逆に、前裁の「遣水もいといたうむせびて、
池の水もえも言はずすぎに、童べ下ろして、雪まろばしせさせ給ふ」と『枕草子』にはない描写があることから
考えて、『枕草子』への対抗意識をよみとつてもよいだろう。

『源氏物語』とこれらの歌は春や秋と比べることで似るが、前者が積雪を配している点は違っており、この取り
合わせが他に「若菜下」巻や「総角」巻にも見られることからして、紫式部にはよほど心に染み入る情景だったの
ではないかと思量される。

叙上のごとく、『源氏物語』『拾遺集』『後拾遺集』のころあたりから冬の月が重んじられるようになり、『千載集』
以後に漸増してゆく。『千載集』冬で例歌を上げると、

月前水鳥といへる心をよめる 前左衛門督公光

437 あしがものすだく入えの月かげはこほりぞ浪のかずにくだくる

冬月といへるころをよめる 平実重

438 夜をかさねむすぶ氷のしたにさへ心ふかくもやどる月かな

題しらず 仁和寺後入道法親王覺性

450 たとへてもいはむかたなし月かげにうす雲かけてふれるしら雪

以上のように、冬の月をことさらに強調する体ではなく、おのおのの様子が具象的に詠まれる。最初は氷が砕け
散るよういきらきらと美しい月光、次は氷の下深くまで宿って趣深く澄む月、最後は薄雲がおおう月に白雪が舞っ

ている幻想的な様という風である。

こう述べてくれば、清輔は興醒めだとされてきた冬の月を特に念頭に置いて「年の一とせあかぬ月影」と詠んでみたのではなかったかと考えられる。次第に増えてきた歌の世界における冬の月の情趣を確固たるものにさせることを意図していたのである。いわば『千載集』時代のさきがけであったと言ってしまうのもよいかもしれない。

ところで、清輔自身はそもそも冬の月をうたっているのである。実は三首見出される。「冬月」の、
217 しろたへの雪ふきおろすかざこしのみねより出づる冬の夜の月

もともと『久安百首』歌であり、風が雪を吹き下ろすという風越の峰から非情なまでに冷たく輝いて出る冬の月を詠む。冬の月の一つの景であり、中世的な感じさえ与える。

二首目は「森間寒月」の、

218 冬がれの森の朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさむけさ

これは『新古今集』冬に「題しらず」として入集し、『中古六歌仙』や『秀歌体大略』に引かれる。『清輔集』は第五句を「さやけさ」とするのが圧倒的に多く、『新古今集』もこの二本文間で異同がある。第四句の措辞については『古今集』秋上の次の歌と関係があるうか。

題しらず

よみ人しらず

184 このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

第二句が六条家流の本には「落ちくる月」「落ちたる月」とあり、後者を承けたものか。

これを用いて弟の重家も、

88 むらぎゆる雪かとみればこのまよりおちたる月の光なりけり（重家集）

と詠むが、この方が『古今集』歌にはより近いと言えよう。

清輔詠は、霜が白く置いた森の朽葉に何にも遮られることなくさす月光を「さむけさ」「さやけさ」とうたう。このどちらの表現がふさわしいか、にわかには判じられないが、いずれにしても冷え冷えと輝く月を詠んでおり、

前歌と変りはない。

三首目は「池上寒月」の、

219 冬の池の玉もにさゆる月影やあくればきゆるこほりなるらん

これは『金葉集』冬の、

月網代をてらすといふことをよめる

大納言経信

268 月きよみせぜのあじろによるひをはたまもにさゆるこほりなりけり

の下句と『清輔集』の「露秋夜玉」とある、

122 たつた姫おける物とやおもふらんあくればきゆる露のしら玉

の第四句を脳裏に思い浮かべてみようか。当該歌は冬の池に美しく冴え渡っている月をうたう。

これら三首は清輔が冬の月に興味をもち、その詠み方を示しているように感じられるのである。

以上のように、清輔詠の四首をとり上げたが、伝統的な王朝美への反発から新しい美への志向を詠む歌と考えて

よいだろう。しかも、これらはかなりの自信をもった詠み方となっており、彼自身を「なさけあらん人」(二二一番歌)の一人としているとまで断じることまでできるだろう。

二

ここでは少し視点を變えて、ある歌を基にして異なった発想でもってうたわれた詠を検討してみよう。反発という観点からも捉えることが可能だと思ふからである。「若菜」とある、

16 しろたへの袖ふりはへて春の野のわかなは雪もつむにぞ有りける

『久安百首』の歌であり、二つの詠歌を合成している。一つは周知のごとく『古今集』春上の、

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる つらゆき

22 かすがののわかになつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむである。そして『後拾遺集』春上の、

正月七日子日にあたりてゆきふりはべりければよめる 伊勢大輔

32 ひとほみななのべのこまつをひきにゆくけさのわかなはゆきやつむらんであり、人々はみな野辺の小松引きに出掛けており、今朝の若菜摘みは人に代って積もった雪が摘むというのだらうかという意。「つむ」は「積む」と「摘む」の掛詞。

清輔詠で二つの歌を合わせたものに「桜」の、

31 をとめこの袖ふる山をきてみれば花の袂もほころびにけりがある。『拾遺集』雑恋の、

題しらず

柿本人麿

1210 をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしきよより思ひそめてきの初め二句と祖父の『六条修理大夫集』に入る「春雨」とある、

191 かすみしくこのめはるさめふるごとにはなのたもとはほころびにけり下の句を「きてみれば」で繋いでいるのである。しかし、そこに何ら趣向を感じとることはできない。当該歌は、人だけでなく雪も若菜を摘んでいるという『後拾遺集』の発想をそのまま踏襲しているが、「ふりはへて」に注目してみると、雪は袖を振りながらわざわざ出掛けてゆくこともなく積もったままで苦もなく摘んでいるとよむことができ、これが眼目となっているのだろう。

あと一首を上げよう。「三歳なりけるこにおくれてよめりける」とある、
347 いとけなき人おりたたばわたり川淵せもいはず水もひななむ

は『古今集』哀傷歌の、

いもうとの身まかりにける時よみける 小野たかむらの朝臣

829 なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに

に拠つていよう。『古今集』歌について、『奥義抄』は注を付しており、「渡り川とは三途河をいふ也。みつせ河ともいへり」とある。当該歌の下の句は、水が干上ってしまつて子供が三途の川を渡れないようにしてほしいとうたう。現世に戻つてくることができからである。本歌はこれとは対照的に増水してほしいと詠む。発想を変え、意表をついた詠み方となつており、ねらいとするのはこの点にあった。

わが子を亡くした悲しみが『古今集』歌に挑ましめたのであろうか。

三

清輔のこういつた姿勢は前にも少し触れたが、次の歌からも首肯できると思う。まず、「月三十五首のなかに」とある、

139 人ごとによもさらしなとおもひしをきくにはまさるをばすての月

を上げるが、第五句は数本に「をばすての山」が見られるけれども「月」とある方が分かりやすい。これは『古今集』雑上の著名な、

題しらず

よみ人しらず

878 わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て
を意識している。清輔はこれに拠つて次のようにも作る。『夫木和歌抄』巻八に、

承安二年（注、一一七二）前参議教長卿家歌合、暁郭公 清輔朝臣

2823 月よりもなぐさめかねつほととぎすをばすて山のあけぼのこゑ

がある。更級の姨捨山にこうこうと照る月を見てもなるほど慰めがたいわが心だが、それ以上に郭公の曙の声には心慰められることがないとうたう。これは定評ある歌に対する反発だと言えるだろう。当該歌についてもこれに通

じるところがある。「人ごと」は「人言」であり、「さらしな」は「更級」と「さらじな」の掛詞、そして「さらじ」は「然あらじ」の約。この掛詞の用例としては、『散木奇歌集』第九の、

ちぎりしことどもをわすれにけるにや、ことざまに思ひなりにけりときこゆる人のがりつかはしける

1379 契りおきしことをばすての山なれどよもさらしなとなをたのむかな

などがある。つまり、清輔詠は、人の言葉を信用していなかったが、実際見てみると聞きしにまさるほどのすさまじい姨捨山の月であったとうたうのである。ここに、「人ごと」(姨捨山を詠んだ歌を指すか)をそのまま鵜呑みにせず、そして確かめてみた清輔がいることになる。ただし、清輔の経歴からして当地に下向したとは思われないが、あくまでも現地を見て詠んだという体裁をとっているのである。

「人ごと」を詠む歌がもう一首見える。「八月十五夜」の、

168 むかしよりいつはりならぬひとことはこよひの月のひかりなりけり

であるが、第三句は「ひとごと」ではないか。第二句の措辞の背景には人の言動を信用しない体の清輔が見られ、この点において前歌に通う。

最後に、当該歌に類似する例歌を上げる。『新勅撰集』雑四に入る、

名所歌あまたよみ侍りけるに 清輔朝臣

1315 ふるさとの人に見せばやしらなみのきくよりこゆるすゑのまつ山

これも同じく『古今集』東歌の有名な、

みちのくうた

1093 君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

を踏まえる。「きく」は「聞く」であろう。これも同様に著名な歌枕をうたっている。「末の松山」を浪が越えることはあり得ないのだが、もし自分に二心があればそんなことも起こりましようという本歌に対して、清輔は、聞いている以上に白浪は末の松山を越えていると、本歌とは必ずしも噛み合わない詠み方をする。『古今集』歌の誇張

した言辭への擲揄と解すれば名歌への挑戦とも考えうるが、いまは「きくより」に注目したい。実際に確かめることはできるはずもないのだが、そうしてみたのである。

たとえポーズであれ、このような態度をとること自体が新しさを生み出そうとする意向の表れであり、これについては既に述べておいた。

四

清輔をして以上のごとき歌を詠むことに駆り立てたものは一体何なのであろうか。ある歌でもって説明してみた。今までもよく引いてきた「月三十五首のなかに」に、

138 世中のなさけもいまはうせにけりこよひの月に人のさはねぬ

が見える。後に『中古六歌仙』に採られる。第五句に「たつねぬ」「ねさめぬ」「とはねは」「たはねぬ」と異同があり、『中古六歌仙』は「たつねぬ」。「さはねぬ」の「さはね」は「さぬ」の中に「は」が入り込んだ形か。「さぬ」はたとえば古く『万葉集』巻一五の「右丹比大夫懐「槍」妻歌」に、

3648 たづがなきあしへをさしてとびわたるあなたづたづしひとりさぬれば

とある。「さ」は接頭語、「ぬ(寝)」は「寝る」、「共寝する」の意で、清輔詠は前者か。最後の「ぬ」は終止形とすれば完了の助動詞である。そうすると、第五句は今宵の美しい月に人が観賞することもなく寝てしまったことを言うのだろう。「たはねぬ」はあるいは「さはねぬ」の誤写かとも考えられ、他の諸本文の場合は意味は通じる。第二句の「なさけ」は二番歌で述べておいたように風流を解する心である。つまり、これは現在の風流心の衰微を嘆いている歌ということになる。翻って、二番歌は情趣の分かる人は少数だという前提でもって詠まれたといま思い至るのである。

清輔がこう嘆くのは、かつて『袋草紙』を例に上げて説いたごとく、今は「末代」の世であるという危機意識を

彼自身が特に強く抱いていたことと関わっているように思う。手垢の付いた景物等ではもはやなく、新しいものを提示する方が緊要であると清輔は判断したのではなからうか。たとえ名歌であってもそれに倣わずに、反発の意を込めてあるいは発想を変えて詠むことが清輔にとってぜひとも必要であった。

ただし、今回取り上げた限りでは進取的な和歌は少数であったことは否めない。このことはとりも直さず清輔は保守的な歌人である裏付けとなりうるが、私は彼なりに少しでも斬新なものを詠むべく努力していると考えており、それを評価したいと思っている。

注 (1) 「藤原清輔詠と清輔本『古今集』」(『島大國文』第二十一号)

(2) 「藤原清輔の詠歌―特に、万葉歌の受容について―」(『島根大学法文学部文学科紀要』第二十二号)

(3) 「藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって」(同前、第二十四号)

(4) 「藤原清輔の「歌枕」詠」(『島大國文』第二十五号)

(5) 久富木原玲氏「和歌的マジックの方法―定家の梅花詠―」(『日本の文学』第4集)。春曙と梅花詠について詳しく述べられている。

(6) 「『袋草紙』における「末代」―著述意図と関連させて―」(『中古文学』第三十号)

清輔の詠歌は特に断つたものを除いて『清輔集』に拠る。本稿の引用は、『新編国歌大観』、『枕草子』、『源氏物語』は、『新日本古典文学大系』本、『河海抄』は玉上琢彌編『紫明抄河海抄』に拠った。